

4.4. 教育委員会からみる「教職インターンシップ」

知識基盤社会の到来と情報技術の飛躍的な発展、経済のグローバル化・少子高齢化など、社会は大きく変化してきた。また、近い将来においても新たな知識や技術の活用により社会は加速度的に変化していくであろうと考えられる。

このような変化の激しい社会情勢の中で、将来に向けてさらに発展していくためには、学校教育を通じた人材育成が重要である。特に、学校教育の直接の担い手となる教員養成については、教育委員会、養成にかかる大学の連携が今後も継続的・計画的に行われる必要がある。

現在、教員の実践的指導力育成のため、学校ボランティアやインターンシップについて、取り組んでいる大学も増え、重要度が増しているが、その実態は多様である。

県外においては、教育委員会が主導して「教職インターンシップ」を実施している自治体も散見することができる。その取組の一例として、教職を希望する学生を対象に教員の仕事を実際に体験する機会の提供を行う事例や、新規学卒採用予定者が、学校現場で教育実践を積むことで教職への適応力を高めたり、指導力を培うことを目的で「採用前教職インターンシップ」として行われたりしている。上記の事例はどちらも、授業実践に関する内容が主である教育実習とは違い、学生が学校現場の手伝いをしながら、児童生徒の個別の対応、事務的な仕事など、学校の中の多様な仕事に触れることで通して、「教職」について、多くのことを学ぶ機会となっている。

沖縄大学においては、周知の通り4年次の教育実習までに、2年次において「教職インターンシップ入門」、3・4年次において「教職インターンシップ実践」を設定し、特に3・4年次には、単位を付帯し、実践知と理論知を相関させることを目的に取り組んでいる。

これまで、沖縄大学と那覇市教育委員会は、那覇市立学校の豊かな人間性を育む教育活動の支援を目的に「連携に関する協定」を結び、学校支援を行ってきた。また、各市内各学校における「教職インターンシップ」の受け入れについては、校長連絡協議会において、各学校に周知すると共に、受付窓口を教育委員会とすることで、市内学校における「教職インターンシップ」について、取組状況などについて全体的な把握を行っている。しかしながら、各学校における具体的な成果や課題などについては、詳細の把握までには至っていない。

これからの教育委員会からみる「教職インターンシップ」の在り方について、那覇市立学校の特色を踏まえた「教職インターンシップ」を展開すること、「教職インターンシップ」について大学及び学校と連携したPDCAサイクルの確立が必要であると考えられる。

那覇市の教育の特色として小中一貫教育や教育課程研究協議会が挙げられる。受け入れ学校において、そのような取組に触れる機会を設定し、「教職インターンシップ」で体験できるよう活動内容に含めるように大学及び那覇市立学校と連携を図り、より受け入れ校の特色を生かした編成を検討していく必要がある。

また、教育委員会として、各学校でどのような取組が行われているのかなどについて大学と情報を共有し、「教職インターンシップ」についての「PDCAサイクルの確立」を大学、学校、教育委員会がそれぞれの立場で意見を出し合う機会をもち、よりよい教員養成を目指すことが大切である。

(那覇市教育委員会 池原 鉄)

5. 「教職インターンシップ」における学生の力量形成について

5.1. 「教職インターンシップ」における学生の教師効力感の受容

本節では、「教職インターンシップ」での経験によって、受講生の「教師効力感」と「大学での学習継続意志」が変化するのかを検討した。

5.1.1. 方 法

(1) 調査対象・時期

2017 年度に「教職インターンシップ入門」（通年）を履修した学生 36 名（男子学生 19 名，女子学生 17 名）を対象として，受講前と受講後に同じ内容の質問紙調査を行った。

(2) 質問紙の内容

質問紙は，三島・安立・森（2010）により作成された下記の 2 つの尺度を用いた。いずれの尺度も小学校教諭を目指す学生を対象に作成されたものであるため，質問項目中の「児童」は「児童・生徒」と置き換えて使用した。また，三島ら（2010）は，5 週間の教育実習を受講した学生を対象に「実習前」と「実習後」に調査を実施している。

①教師効力感

三島ら（2010）が，Megan & Anita（2001）を邦訳して作成した「教師効力感尺度」（18 項目）を用いた。当尺度は 3 因子構造である。第 1 因子「児童・生徒支援に関する教師効力感」は，「物事を批判的に考えがちな子どもを支援することができる」「子どもたちが学習の価値を見出すような支援ができる」など全 7 項目からなる。第 2 因子「学級経営に関する教師効力感」は，「数人の子どもが引き起こす授業妨害にうまく対応することができる」「学級の秩序を乱す子どもや，騒がしい子どもをうまく落ち着かせることができる」など全 6 項目からなる。第 3 因子「授業実践に関する教師効力感」は，「説明を受けた子どもたちが困惑しているときには別の説明や例を与えることができる」「非常によくできる子どもに対しても適切な課題を与えることができる」など全 5 項目からなる。回答は，各項目について自分にあてはまると思っている程度について，「全くそう思わない（1）」から「非常にそう思う（7）」までの 7 件法で回答を求めた。

②学習の継続意志

三島ら（2010）が作成した尺度のうち，「実践的内容に関する項目」（17 項目）のみを用いた。当尺度は 3 因子構造である。第 1 因子「教授方法」は，「クラスの活動について」「学習が遅れがちな子どもに対する授業時間外の学習支援の仕方について」など全 8 項目からなる。第 2 因子「児童とのかかわり方」は，「教師と児童という立場における児童との距離のとり方について」「反抗的な子どもに対する対応の仕方について」など全 5 項目からなる。第 3 因子「補助資料の活用」は，「配布資料の作成の仕方について」「配布資料の効果的な活用法について」など全 4 項目からなる。回答は，各項目について学び続けたいと思っている程度に応じて，「全くそう思わない（1）」から「非常にそう思う（7）」までの 7 件法で回答を求めた。

5.1.2. 結 果

(1) 「教職インターンシップ入門」による「教師効力感」の変化

「教師効力感」18 項目の得点変化を明らかにするため、「教職インターンシップ入門」受講前と受講後の得点を用いて、対応のある t 検定を行った。その結果、全項目において有意差は確認されなかった（表 3）。

表 3 「教職インターンシップ入門」受講前と受講後の「教師効力感」各項目得点の比較

	受講前		受講後		t値	
	M	(SD)	M	(SD)		
第1因子「児童・生徒支援に関する教師効力感」						
1. 物事を批判的に考えがちな子どもを支援することができる	4.81	(1.14)	4.81	(1.14)	0.00	n.s.
14.子どもたちが学習の価値を見出すような支援ができる	4.78	(0.99)	4.56	(1.40)	1.07	n.s.
3. 子どもたちに行う発問を工夫することができる	4.92	(0.97)	4.64	(1.07)	1.57	n.s.
10.子どもに期待する行動、態度、言動などを明確にすることができる	5.22	(1.05)	5.00	(1.17)	1.05	n.s.
5. 子どもの学習について、多様な評価方法を用いることができる	4.81	(1.37)	4.81	(1.19)	0.00	n.s.
6. 困難に直面しても、子どもが乗り越えていけるような支援ができる	5.00	(1.31)	4.92	(1.25)	0.29	n.s.
7. 子どもからの難しい質問に上手く応じることができる	4.33	(1.10)	4.25	(1.36)	0.33	n.s.
第2因子「学級経営に関する教師効力感」						
8. 数人の子どもが引き起こす授業妨害にうまく対応することができる	4.61	(1.29)	4.36	(1.29)	1.07	n.s.
2. 学級の秩序を乱す子どもや、騒がしい子どもをうまく落ち着かせることができる	4.78	(1.12)	4.53	(1.28)	1.16	n.s.
15.教室で反抗的な行動をとる子どもに上手く対応することができる	4.72	(1.11)	4.39	(1.23)	1.48	n.s.
11.複数の教育方略を、臨機応変に使い分けることができる	4.42	(1.05)	4.53	(1.13)	0.56	n.s.
12.クラスの子どもたちみんなをまとめるような学級経営ができる	4.94	(1.04)	4.61	(1.42)	1.21	n.s.
18.子どもの創造性を伸ばすことができる	5.25	(1.13)	4.86	(1.38)	1.45	n.s.
第3因子「授業実践に関する教師効力感」						
17.説明を受けた子どもたちが困惑しているときには別の説明や例を与えることができる	5.25	(1.05)	4.97	(1.23)	1.38	n.s.
4. 非常によくできる子どもに対しても適切な課題を与えることができる	4.83	(1.18)	4.89	(1.21)	0.21	n.s.
16.子ども個人の適切なレベルにあった指導をすることができる	5.00	(1.15)	4.81	(1.28)	0.80	n.s.
13.子どもたちに教室のルールを守らせることができる	5.06	(0.91)	5.20	(1.26)	0.65	n.s.
9. 学習が遅れがちな子どもの理解力を向上させることができる	5.03	(1.11)	5.06	(1.37)	0.12	n.s.

(2) 「教職インターンシップ入門」による「学習の継続意志」の変化

「学習の継続意志」17 項目の得点変化を明らかにするため、「教職インターンシップ入門」受講前と受講後の得点を用いて、対応のある t 検定を行った。その結果、全項目において有意差は確認されなかった（表 4）。

表 4 「教職インターンシップ入門」受講前と受講後の「学習の継続意志」各項目の得点の比較

	受講前		受講後		t値	
	M	(SD)	M	(SD)		
第1因子「教授方法」						
1. クラスの活動について	5.97	(1.06)	6.00	(1.07)	0.13	<i>n.s.</i>
2. 学習が遅れがちな子どもに対する授業時間外の学習支援の仕方について	5.97	(1.13)	6.06	(1.01)	0.42	<i>n.s.</i>
4. 授業時間に見合った授業内容の立て方について	6.08	(0.97)	6.08	(1.13)	0.00	<i>n.s.</i>
5. 教材研究の仕方について	5.75	(1.16)	6.08	(1.18)	1.53	<i>n.s.</i>
7. 授業の内容でのわかりやすい説明の仕方について	6.00	(0.99)	6.25	(1.13)	1.27	<i>n.s.</i>
8. 板書の仕方について	5.94	(1.09)	5.94	(1.15)	0.00	<i>n.s.</i>
11. 毎時間の授業の目標の立て方について	5.92	(1.08)	5.97	(1.11)	0.28	<i>n.s.</i>
14. 宿題などの子どもの提出物の添削の仕方について	5.75	(1.30)	5.72	(1.32)	0.09	<i>n.s.</i>
第2因子「児童・生徒との関わり方」						
3. 教師と児童、生徒という立場における児童生徒との距離の取り方について	5.94	(1.01)	6.17	(1.13)	0.88	<i>n.s.</i>
10. 反抗的な子どもに対する対応の仕方について	5.97	(1.25)	6.08	(1.18)	0.52	<i>n.s.</i>
12. 子どもの叱り方について	5.86	(1.48)	5.92	(1.48)	0.17	<i>n.s.</i>
13. 保護者からのクレームに対する対応の仕方について	5.50	(1.52)	5.72	(1.49)	0.75	<i>n.s.</i>
16. 子どもとの相互理解を通した、信頼関係の築き方について	6.31	(1.04)	6.19	(1.14)	0.51	<i>n.s.</i>
第3因子「補助資料の活用」						
6. 配布資料の作成の仕方について	5.86	(1.15)	5.97	(1.18)	0.46	<i>n.s.</i>
9. パソコンやインターネットなどの情報機器の活用の仕方について	5.86	(1.31)	5.86	(1.22)	0.00	<i>n.s.</i>
15. 配布資料の効果的な活用法について	5.75	(1.30)	5.81	(1.26)	0.24	<i>n.s.</i>
17. 保護者への子育て支援の仕方について	5.78	(1.53)	5.81	(1.26)	0.09	<i>n.s.</i>

5.1.3. 考 察

「教職インターンシップ入門」を履修することによって、受講生の「教師効力感」と「実践的内容に関する学習の継続意志」に変化が見られるかを数量的に検討したが、いずれの項目においても統計的に有意な結果は得られなかった。

その要因として、三島らの調査との対象学生の違いが考えられる。三島らは、小学校教員養成課程4年生の教育実習生を対象に実施しているが、本調査の対象学生の多くは中等教職課程2年生であった。学年と課程による違いが結果に影響したのではないか。今後は、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」で身につけるべき能力等に焦点化した独自の指標を作成することで、インターンシップの教育的効果を明らかにできると考えられる。また、インターンシップ受入校によって経験できる内容が大きく異なるため、受講生全体としての変化は見られにくいのかかもしれない。インタビュー調査では、受入校による違いや個別の変化が見られるのではないだろうか。

<引用文献>

三島知剛・安立大輔・森敏昭（2010）教育実習生の実習前後における学習の継続意志の変容：実習前後の教師効力感の受容・実習の自己評価に着目して，学習開発研究，3，91-99.
（沖縄大学 吉川麻衣子）

5.2.「教職インターンシップ実践」における学生の自己評価

本節では、「教職インターンシップ実践」を通して、生徒理解や使命感等にどのような変化があるのかについて検討した。

5.2.1.方 法

(1) 調査対象・時期

2017 年度に「教職インターンシップ実践」(通年)を履修した学生 17 名を対象として、中間指導と事後指導において同じ内容の質問紙調査を行った。

(2) 質問紙の内容

質問紙は、独自に作成した「①勤務状況と勤務態度」、「②生徒理解」、「③使命感」、「④積極性、創造性」に関する各 2 項目の計 8 項目である。また、回答は、「十分である」「ある程度満たしている」「満たしている」「努力を要する」の 4 段階で行ってもらった。

詳細は以下の通りである。

①勤務状況と勤務態度

- ・常に、欠勤・病休・早退等をしないよう心掛けた。
- ・常に挨拶をする、時間を守る、場に相応しい服装を心掛けた。

②生徒理解

- ・生徒の発達段階について理解し、課題に対応した関わりができた。
- ・生徒と積極的にかかわり、双方向でコミュニケーションを取ることができた。

③使命感

- ・「教師になる」という強い意志を持ち、意欲的に活動に取り組んだ。
- ・教職員に対し謙虚な姿勢で接し、自ら進んでものごとに取り組んだ。

④積極性、創造性

- ・「私ならこうする」という自分の意見や考えをしっかりとって活動に取り組んだ。
- ・これまで学んだ知識やスキルを行動化につなげようと意欲的に取り組んだ。

5.2.2.結果と考察

①「勤務状況と勤務態度」について

図 2 や図 3 によると、「教職インターンシップ実践」の学生は、中間指導と事後指導の両方の振り返りの段階において、良好な実習状況であったと考えられる。当然のことであるが、事前指導等では「挨拶、服装、時間、言葉遣い、守秘義務、人権等」についての指導も徹底しているためその影響もあると言えよう。

②「生徒理解」について

図 4 によると、生徒の発達段階に応じた対応については、中間指導の段階よりも事後指導の段階において「十分である」と考える学生が減り、「ある程度」、「満たしていない」と評価する学生が増えている。一方で、図 5 によると、生徒と積極的に関わりながら双方向でのコミュニケーションがとれると考える学生が増えている。このことから、学生たちは、生徒とコミュニケーションを取ることにについておおむね良好であるが、生徒一人一人を理

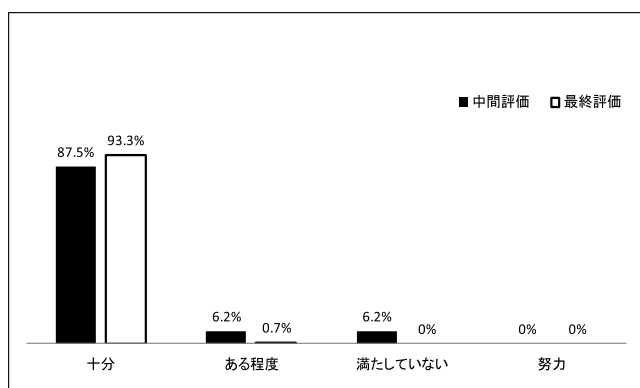


図 2 勤務状況について

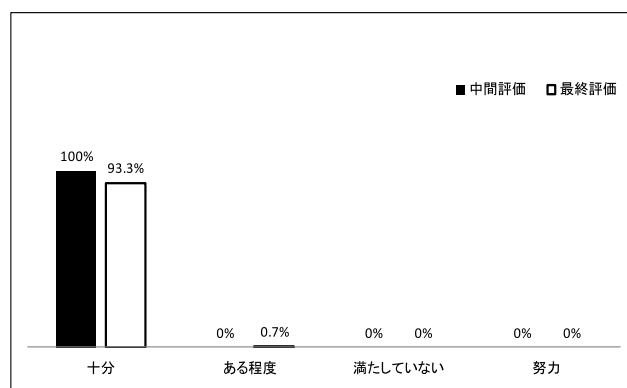


図 3 勤務態度について

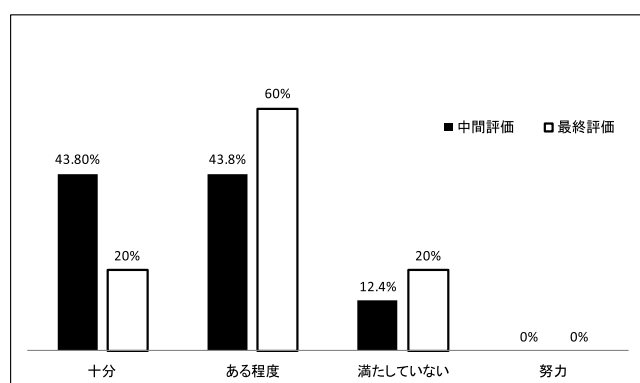


図 4 生徒の課題に対応した関わり

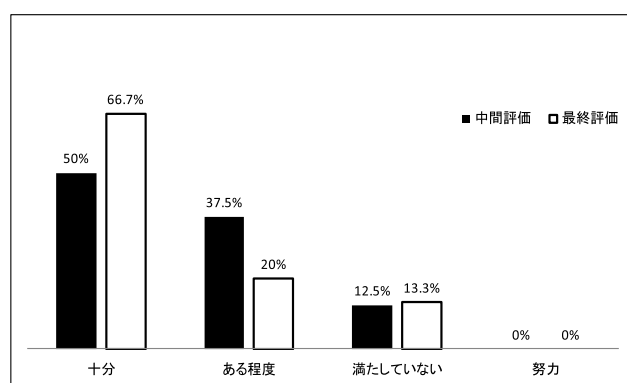


図 5 双方向でのコミュニケーション

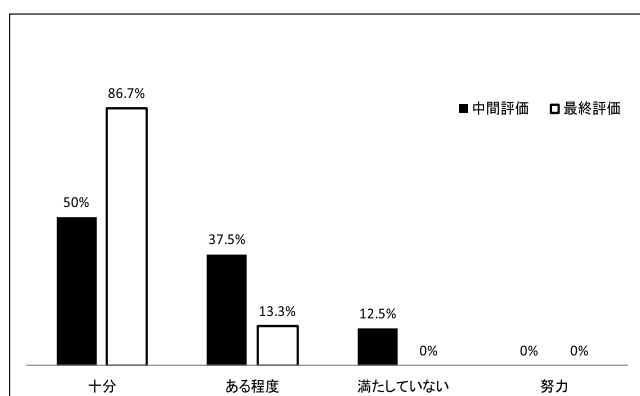


図 6 教職への強い意志

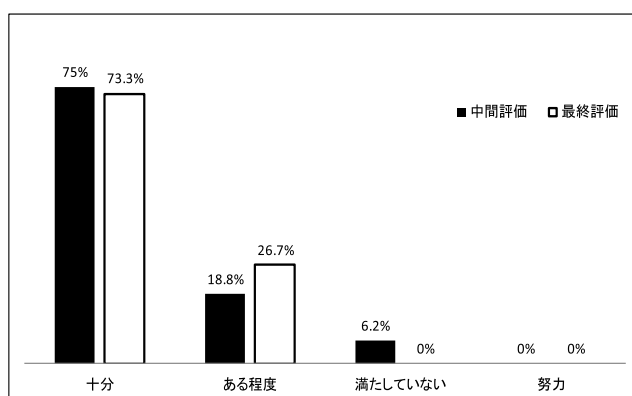


図 7 謙虚な姿勢

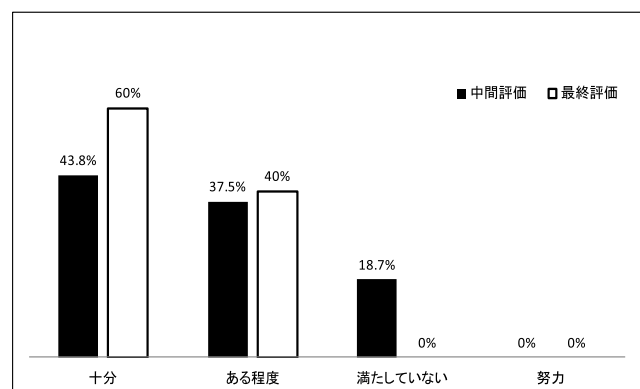


図 8 自分の意志や考え

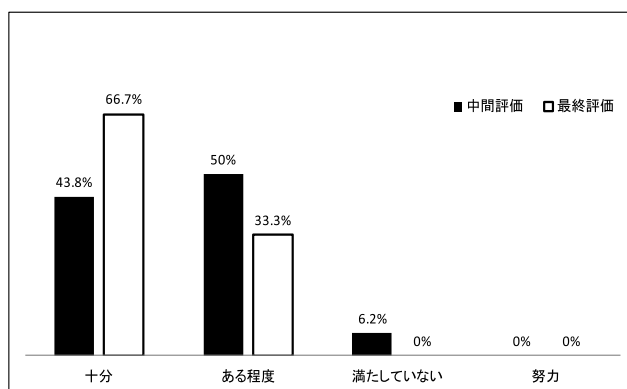


図 9 知識やスキルを行動化

解しながら、個に応じた対応をすることについては課題を抱えていることが推察される。

とりわけ、生徒との距離感（叱り方やそのタイミング）や特別に支援を要する生徒への声掛けについては多くの学生が課題と考えていた。

③「使命感」について

図 6 によると、学生はインターンシップを通して「教師になる」という意思がより強くなっている。また、図 7 によると、教職員に対して謙虚な姿勢で関わり、自ら進んでものごとに取り組むことについても高い評価をしている。

「教職インターンシップ実践」は、現在のところ選択科目のため比較的意欲の高い学生が履修している。そのため、「教職インターンシップ入門」に比べて、より実践的な内容が増え、先生たちとの関わりが増える「教職インターンシップ実践」は教師になるという意志を強くし、意欲を高めることに繋がっていると言えよう。そこには、先生たちとの良好な関係が築けていることも要因として挙げることができる。

④「積極性、創造性」について

図 8 や図 9 によると、学生は、中間指導の段階よりも事後指導の段階における評価が良くなっている。その理由として、中間指導において後半の取り組みに対して、個別で課題を設定し、調査研究に取り組む課題を科したことが挙げられる。そのため、学生は後半のインターンシップを自分なりの課題を持ちながら行っており、積極的に活動することができるようになったと考えられる。

以上を踏まえると、「教職インターンシップ実践」を通して学生たちは、教職に対する「使命感」や「積極性」等を高めることができた感じている。原（2016, p201）は、「教育実習前にインターンシップを行った学生は『教師という職業に対する見方』や『理想の教師像』が良い方向に変化した」と述べている。単純な比較はできないが、「教職インターンシップ実践」を履修した学生たちは、継続的かつ長期にわたって生徒や現場の先生と関わりながら教育活動に携わることで、生徒理解への認識を深め、教職への意志や意欲を高めたまま教育実習に臨むことができると考えられる。

<引用文献>

原清治（2016）9 章学校インターンシップ参加学生のキャリア意識の育成 学校現場体験の「効果」と「意義」をめぐって．田島充士・中村直人他編．学校インターンシップの科学 大学の学びと現場の実践をつなぐ教育．ナカニシヤ出版：p201

（沖縄大学 嘉数健悟・上地幸市）

5.3. 学生の振り返りから見た「教職インターンシップ」の成果

5.3.1. 同一校で「教職インターンシップ実践」までの実習を行った学生の振り返り

同一校において「教職入門セミナー」、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」の実習体験を 2 年間にわたって実施することにより、教職員との関係性が深まり、教科指導力や特別な支援を要する生徒への関わり方等具体的な指導の在り方を学ぶことができたと考えられる（表 5）。また、継続的な実習を通して、生徒の実態を把握し、

表5 「教職インターンシップ実践」における学生の振り返りの内容

	中間報告	最終報告
M・Nさん	水泳授業における指導補助の場面で、フォームの改善を課題にしている生徒に、iphoneを活用して指導したら、自らの課題を認識しフォーム修正につなげる指導支援ができた。	体育授業の場づくりについて」という課題意識をもって授業に参加し、活動が積極的な男子グループと意欲的でない女子グループの活動場所を入れ替えることによって状況が変わるのではないかという問題提起をすることができた。
K・Mさん	「学校を美術館に」というテーマのもと、階段のフラッシュカードが古くなっていたので、英単語や四字熟語など、学びにつながるカードを作成し掲示した。生徒が歩くだけで学力向上につながるというねらいで実施した。	「成長木」の実践は、「好きなこと」「好きな教科」等、お題を出して漢字一文字で表すという取り組みをしたが、趣旨の徹底や注意事項、落書きなどの課題が残った。次年度は、教育実習を同じ学校で行うので、この失敗体験を生かしたい。
T・Uさん	陸上競技でタイム係の役を与えられ授業に参加した。忘れ物をした生徒への教師の対応について考えさせられた。また、校長先生が校内の見回りや環境整備に力を入れているため、後ろ姿で学ばせることの大切さを目の当たりにした。	「評価の仕方について」の課題をもって後期は取り組んだ。積極的に試合に参加している生徒の評価は、A評価だと思っていたが、基本的に取り組むことは当たり前なので、プラスαで安全に配慮しているか、準備・片付け等に参加しているかなどをしっかりとやっている生徒がA評価だということが分かった。

コミュニケーションが深まり、学級活動への関わり方や生徒指導の在り方等を学ぶことができている。その背景には、教職インターンシップ実践の中間指導において、個別の課題を設定し、探究学習計画書を作成し調査研究に取り組ませたことが影響していると考えられる。具体的には、「効果的な場づくりとは」や「評価の観点の捉え直し」、「学校環境の整備」等、個々の学生が自分で設定した課題の解決に向けて「教職インターンシップ」に取り組んでいた。

一方で、「教職インターンシップ入門」と「教職インターンシップ実践」を実施したが、実践内容や課題探究につながらず、系統的な学びの深まりが見られなかった事例もあった。N・Sさんは「インターンシップ入門では、授業参観や教師の作業補助、教具づくり等に関わることができたが、実践においては、教師としての実践的指導力の基礎を培う学びができず、主に環境整備や対外競技への参加・そのための休日の指導等に関わった」と報告していた。そのため、「教職インターンシップ」の考え方・進め方や入門と実践の差別化等について、各学校への詳しい説明を行い、学校の理解と協力を得るとともに、実践事例集などを作成・配布し、周知を図っていく必要がある。

5.3.2. 学生の実践的指導力の育成の可能性について

表 6 は、ある学生が「教職インターンシップ実践」の中間指導と事後指導において「何を見て、何を体験し、何を学んだか」について報告したものである。最終報告では、「教職インターンシップ」を中心とした本学の実習系科目のねらいや系統性について、学校現場の理解と協力が得られ、学生の成長につながるような取り組みを行っていることが読み取れる。具体的には、大学での各教科や道徳、特別活動などの専門的な学びとその学びを生かした現場での実習、現場教師との T・T による授業への関わりなど、大学での学びを現場で経験することでさらに学びを深めている。特に、各教科の授業参観や指導案検討会、校内研修会などへの参加は、学生が直に学校の教育活動に継続的に関わることになり、実践的指導力の基礎を培うことにつながっていると考えられる。

表 6 「教職インターンシップ実践」において「何を見て、何を体験し、何を学んだか」の報告の内容

	中間報告	最終報告
S・Kさん	英語、数学の授業観察・指導補助を行う。英語の授業では、生徒の反応を見ながら臨機応変に対応している教師の指導力を学ぶことができた。また、数学の授業では、習熟度の違う生徒に個別の問題を与え対応していた。	前期終了後に、生徒の興味を引き付ける授業展開とは、生徒の考えを引き出す発問とは、生徒の口調、表情等から生徒の変化への気づき方等について、大学で学び直しを行い、後期のインターンシップに取り組んだ。後期は、数学、理科、道徳の授業に T・T で参加したが、授業のタイムマネジメントや生徒への指示や生徒自身で説明させる指導が適切であったとの評価を受けた。また、大学での道徳の授業の学びを生かして、範読がうまくできた、中心発問の取り上げ方や生徒の考えを揺さぶるエピソード、切り返しの質問ができていたという授業研究会での助言があった。今後の課題としては、効果的な ICT の活用や生徒の発言・考えから、めあて・まとめを導く指導法や知的好奇心をくすぐる授業づくり、生徒指導の 3 機能を生かした授業づくりを学んでいきたい。

(沖縄大学 上地幸市・天久大輔)

6. 「教職インターンシップ」の評価指標について

本学では、「教職インターンシップ」の評価をどのように行うのかが長年の課題であった。なぜなら、教育実習では実習生の指導教員がおり、教科の指導を中心とした授業の計画や実践等について指導、助言をもらうことができ、その関わりの中で評価まで行ってもらっている。一方で、「教職インターンシップ」は週1回の午前中のみで特定の指導教員がいるわけではなく（学校によっては教科を固定し、複数の先生が関わっているケースもある）、教科指導や個別指導、特別な支援を要する生徒の学習補助など様々な教育活動に関わっている。そのため、「教職インターンシップ」の評価は、教育実習と異なり実習を通して学生が何に悩み、何を学んだのかなどについて日誌や体験報告会、レポート等でしか行えていないのが現状である。

しかしながら、本学が教育実習や「教職インターンシップ」のような現場体験的授業科目をコアにしながら体系的にカリキュラムを用意し、教育現場を理解させると同時に、観察→体験（参加）→実習→振り返りを行わせて実践的な指導力をつけさせることを目指すのであれば、「教職インターンシップ」を通して何を学ばせたいのか、体験を通して何を学んでもらいたいのかを示す必要がある。そこで、本学の「教職履修カルテ」の自己評価シートを参考に「教職インターンシップ」の評価指標を作成することにした。なぜなら、「教職履修カルテ」の自己評価シートは、本学の教職課程の「教員免許状取得に関わる方針」との関連によって作成されているからである。言い換えれば、本学の教職課程においてどのような力をつけたいのかが示されているからである。

策定にあたって、本事業の学内委員会である「事業推進委員会」では、「大学での学びを学校現場で深める」あるいは「学校現場での学びを大学で深める」という視点から、表7の黒枠の部分（14項目）を「教職インターンシップ」において学生に学んでもらいたい、学びを深めてもらいたい内容であると考えた。さらに、「事業推進委員会」では、項目の内容を見直し、表8を「沖縄大学教職インターンシップ評価指標（案）」として、学外委員を加えた「教職インターンシップ推進委員会」に提案し、意見をもらった。その結果が表9の暫定版「沖縄大学教職インターンシップ評価指標」（教師用）である。＊学生用（自己評価）は、規準の文末を「できる」などとし、自己評価もしてもらう。なお、策定した評価指標は、次年度以降に活用しながらその妥当性を検証していく。

策定にあたって、以下の点に留意した。

- ・現場の先生が評価しやすいように3段階での評価とし、すべての評価をB基準で行う。
- ・学生の自己評価と学校現場での評価を実施し、ズレがある場合は大学での事後指導や教職課程での教育に活用する。
- ・すべての項目において「十分満足できる」や「おおむね満足できる」を求めるのではなく、「努力を要する」項目があっても良い。
- ・策定した「沖縄大学教職インターンシップ評価指標」は、学校現場での学びを大学で振り返り、学生の成長につなげていくものであるため、その意図が学校現場にも伝わるように説明する機会（教職インターンシップ目的や評価について）を設ける。

表 7 本学の「教職履修カルテ」の自己評価シート

必要な資質能力の指標			自己評価			
指標			非常に悪い	悪い	よい	非常によい
本学の教職理念	・教職論 ・教職入門セミナー ・教育制度論 ・教育の歴史と思想	教職の意義	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。			
		教育の理念・教育史・思想の理解	教育の理念、教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識を習得していますか。			
		学校教育の社会的・制度的・経営的理解	学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識を習得していますか。			
		心理・発達論的な子ども理解	子ども理解のために必要な心理・発達論的基礎知識を習得していますか。			
・児童生徒理解	・教職入門セミナー ・学習心理学 ・生徒指導	学習集団の形成	学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得していますか。			
		子どもの状況に応じた対応	いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。			
		他者意見の受容	他者の意見やアドバイスを受け止め、理解や協力を得て課題に取り組むことができますか。			
		保護者・地域との連携協力	保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか。			
・児童生徒理解 ・社会性	・発達心理学 ・学習心理学	役割遂行	集団において、率先して自らの役割を見つたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。			
		発達段階に対応したコミュニケーション	子どもたちの発達段階を考慮して、適切に接することができますか。			
		公平・受容的態度	子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができますか。			
		社会人としての基本	挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項が身についていますか。			
・対人関係能力	・発達心理学 ・学習心理学 ・教育相談の理論と方法	教科書・学習指導要領	教科書や学習指導要領の内容を理解していますか。			
		教育課程の構成に関する基礎理論・知識	教育課程の構成に関する基礎理論・知識を習得していますか。			
		道徳教育または特別活動	道徳教育または特別活動の指導法や内容に関する基礎理論・知識を習得していますか。			
		総合的な学習の時間	「総合的な学習の時間」の指導法や内容に関する基礎理論・知識を習得していますか。			
・教科等の指導力	・各教科の指導法 ・道徳教育 ・特別活動	情報機器の活用	情報教育機器の活用に係る基礎理論・知識を習得していますか。			
		学習指導法	学習指導法に係る基礎理論・知識を習得していますか。			
		授業構想力(指導案作成も含む)	教材研究を生かした各教科の授業を構想し、子どもの反応を想定した指導案としてまとめることができますか。			
		授業展開力	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができますか。			
・教科等の指導力	・各教科の指導教 ・教育方法論	教材分析能力	教材を分析することができますか。			
		教材開発力	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができますか。			
		表現技術	板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けていますか。			
		課題認識と探求心	自己の課題を認識し、その解決にむけて、学び続ける姿勢を持っていますか。			
・課題探求	・教育実習 ・生徒指導	教育時事、地域問題	いじめ、不登校、学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持つことができますか。			

表 8 「沖縄大学教職インターンシップ評価指標（案）」

必要な資質能力の指標			段階		
大学の教職理念	評価項目	行動基準			
教育的愛情 使命感や責任感	教職の意義	校務分掌等の役割を理解し、強い意志と情熱をもって学校教育に関わることができる。			
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	服務規律や法令を遵守し、チーム学校の一員として学校教育に関わることができる。			
	社会人としての基本	挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項を身につけている。			
	心理・発達論的な子ども理解と対応	様々な実態の生徒を理解し、状況に応じた対応をしている。			
生徒理解	公平・受容的態度	子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することができる。			
	学び合う学習集団づくり	学級や教科指導の場面での学び合う集団づくりについて理解している。			
	他者との協働	教職員やメンバーの意見やアドバイスを受け止め、協働して課題に取り組むことができる。			
対人関係・社会形成	役割の理解と遂行	与えられた役割をきちんとこなしたり、率先して自らの役割を見つけることができる。			
	保護者・地域との協働	保護者や地域との連携、学校行事等の重要性を理解し関わるることができる。			
	課題認識と探求心	自己の課題を認識し、その解決に向けて学び続ける姿勢を持っている。			
課題探求	教育時事・地域問題	いじめ、不登校、学校教育に関する新たな課題に関心を持ち、自分なりに意見を持っている。			

表 9 暫定版「沖縄大学教職インターンシップ評価指標」（教師用）

必要な資質能力の指標				十分満足できる	おおむね満足できる	努力を要する
大学の教職理念	評価項目	規 準				
教育的愛情 使命感や責任感	教職の意義	教師の一日の過ごし方を理解し、強い意志と情熱をもってインターンシップに取り組んでいる。		A	B	C
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	服務規律や法令を遵守し、「チーム学校」の一員としてインターンシップに取り組んでいる。		A	B	C
	社会人としての基本	挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項を身につけている。		A	B	C
	心理・発達論的な生徒理解と対応	様々な実態の生徒を理解し、状況に応じた対応をしている。		A	B	C
生徒理解	公平・受容的態度	生徒の声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接している。		A	B	C
	学び合う学習集団づくり	学級指導や教科指導の場での学び合う集団づくりについて理解している。		A	B	C
	他者との協働	教職員やメンバーの意見やアドバイスを受け止め、協働して課題に取り組んでいる。		A	B	C
対人関係・社会形成	役割の理解と遂行	与えられた役割をきちんとこなし、率先して自らの役割を見つけている。		A	B	C
	保護者・地域との協働	保護者や地域との連携、学校行事等の重要性を理解している。		A	B	C

（沖縄大学 嘉数健悟）

7. 「教職インターンシップ」に期待すること

那覇市立仲井真中学校 校長
比嘉俊博

「教職インターンシップ推進委員」として1年間関わらせていただき、御礼申し上げます。

沖縄大学の同事業は、「教育委員会と学校、大学との連携によって学校現場のニーズと教師志望学生への指導がマッチするようなシステムによって『教職インターンシップ』を実施し、継続的な学校現場での実習経験を有機的に結びつけ、それぞれの実習を明確にする点を最大の成果目標とする」の目的が明確に示されており、今後の実践的で優れた取組に期待しているところであります。

学生にとっては、大学で学んだ教職の理論が、教職インターンシップや教育実習を通じて、「実践的で生きる知識であった」や「理論が実践に生かされた」という実感を得ることが大切だと思います。この視点から、貴大学「教職インターンシップへ期待すること」を4点述べます。

- (1) 学生が大学で学んだ理論や知識と、インターンシップ体験で学んだ実践や知識が、ギャップとならない教育課程及び科目の編成
- (2) 教職インターンシップ、教育実習及び学校ボランティアのそれぞれの教育活動の位置づけ、関与、及び協力関係の整理
- (3) 「沖縄大学教職インターンシップ評価指標」の充実
実施に当たって下記のことを留意したい。
 - ① ガイダンス機能の充実 ⇒ 学生が教員に求められる資質を理解し、教員としての適格性を把握できる評価の在り方
 - ② 学生、大学及び実習校における資質能力指標の共通理解
 - ア 大学と実習校の連携充実
 - イ 学生が自己評価する際、目指すべき行動やあるべき姿等の評価基準の具体提示
- (4) 教師としての資質能力の獲得は、教師に就いてからはじめるのではなく、その準備教育（大学）の段階から導入していることを、学生に徹底理解させたい。

むすびに、大学側は、「教職インターンシップ」を中核に据えた現場体験型教員養成を通じ、教員養成の実りを上げ、学校現場で活躍できる沖縄大学出身の教員を育てていただきたいと思います。皆様のご健勝とご活躍を祈念いたします。

「教職インターンシップ」に期待すること

浦添市立仲西中学校 教頭

仲嶺香代

■大学・教育委員会・学校の連携による「たくましく柔軟な教師力」を備えた学生の育成を目指して

①学生の本来の姿を生かす

- ・スポンジのように何でも吸収する。
(見よう見まね，模倣の段階，逆に教師の姿を分析・評価もしている)
- ・失敗を恐れず挑戦する。
(学生であることを大いに活用し，失敗が許されることを逆に強みに変えてチャレンジする)
- ・元気がある。
(若者の強み，学校も明るくなり生徒も喜ぶ)
- ・配置された学生同士の助け合い・学び合い・高め合い。
(一人ではできないことを協力して行える)

②大学附属ではない公立中学校の強みを生かす

- ・各学校の校内研究，学校行事を事前に一覧表にすることで，(教育委員会でとりまとめ，情報提供，学校現場との調整) 学生に多くの機会を与えて育てることができる。
- ・いろいろな生徒と触れ合える。
(特別支援学級，相談室登校，遊び非行傾向の生徒たち)
- ・外部からの学校支援チームの方々とも出会える。
(特支ヘルパー，生徒サポーター，SC，SSW，小中アシスト相談員等)
- ・それぞれの学校の特色を生かした取組がある。
(学生同士で比較したり情報共有したりすることができる)

③教職員の意識改革と校内 OJT の推進に生かす

- ・将来教師を目指す学生を育てているという意識の醸成につながる。
- ・若手教師を育てる視点を持って，学生を共に育てることができる。

「教職インターンシップ」に期待すること

那覇市教育委員会
学校教育課指導主事
池原 鉄

これまで学校の中核を担ってきたベテランの教員が退職し、学卒新規採用者が増えていく中で、学習指導や生活指導を行う際に必要な知識や技能を基盤とした実践的指導力を身に付けた教員を育成することが急務である。沖縄大学において教育実習を実施する前に教職インターンシップを設置し、教員養成を行っていることは、このような時代背景を考えると大変意義深いことである。

「教職インターンシップ」は教職を志す学生にとって、自分の進路を具体的に形付けていく最初の分岐点になるのではないかと考えます。「私はどのような教師になりたいのか」を考えたとき、「教職インターンシップ」において、現場の教師の働く姿を目の当たりにし、自分をみつめる機会となり、これからインターンシップや教職課程を通してどんなことに取り組むべきかを自己決定していく機会になるのではないかと考えます。

今回、教職インターンシップ推進委員会を設置し、『教育実習との役割を明確にした「学校インターンシップ」の在り方』について、大学・教育委員会・学校の関係者連携を図りながら意見交換できたことは、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（答申）に示された「教員は学校で育つ」という理念のもとでの教員養成の「学び」のスタートの支えとなる。

私は、これからの教員にはより一層の「鷹の目・蟻の目・魚の目」をもつことが大切になるのではないかと考えます。鷹のように、高いところから物事全体を見渡し、課題を捉え、蟻のように目の前の様々な課題を発見し、周りに記を配りながら分析していくような目、大局的に見通しをもつ目、魚のように、時代の変化や情報の流れを感じ取り、方向性を決定していく目をもつ教員がこれからの時代に求められる教員ではないかと考えます。

これからの「教職インターンシップ」には、「理論と実践」が結びついた教員養成、大学の講義で学んだこととインターンシップで体験したことを有機的につなげる体制づくりが必要となります。

大学での教育課程とインターンシップを「鷹の目・蟻の目・魚の目」で評価していくような大学・学校・教育委員会の関係者で構成された「インターンシップ連絡協議会」のような組織と「教職インターンシップ」における具体的な評価指標の作成が必要ではないかと考えます。

沖縄大学の「教職インターンシップ」・教職課程を巣立った教員が、これからの沖縄県の教育の発展を牽引していくことを期待しています。

8. まとめと課題

本事業では、教育委員会と学校、大学との連携・協働による「教職インターンシップ」導入の課題と成果を整理し、既存の教育実習との役割を明確にしたカリキュラムを提案することを目的とした。具体的には、以下の3点であった。

- ①「学校インターンシップ」や既存の教育実習の実施に関わる教育委員会や学校、大学との連携・協働の在り方についての取り組みの成果と課題を明らかにする。
- ②「学校インターンシップ」や既存の教育実習までの継続的な学校現場での経験が学生の「力量」形成にどのような影響を与えるのかを事例的に明らかにする。
- ③教育委員会と学校、大学の連携による「学校インターンシップ」と既存の教育実習における学習の内容を明確にし、関連科目のあり方カリキュラムを提案する。

そこで、それぞれの成果と課題について以下に示す。

①「教職インターンシップ」の実施に関わる連携・協働の在り方について

本学では、2011年度から近隣市町教育委員会（5市2町）との協定による「教育ボランティア実践」を行い、2015年度からは3市1町（那覇市、浦添市、豊見城市、南風原町）新たな協定書による協定を交わし、「ボランティア」から「インターンシップ」へその内容の充実を図ってきた。

新協定を交わしてから、本学、教育委員会や学校現場とのより密な連携のもと、協働して学生の実習系科目を実施している。特に「教職インターンシップ」に実施に際しては、学校現場が学生の受け入れに当たって、「私たちの学校ではインターンシップに来てくれれば、このような指導を行いますよ」というような「受け入れ計画書」を作成し、教育委員会の取りまとめのもと、大学と連携しながら学生の指導が行われており、協働して未来の教師を育てていけるような仕組みが構築されつつある。この点だけでも、本学の「教職インターンシップ」が、教育委員会、学校現場との連携によって実施できていることが明らかといえよう。

一方、本学は2011年度から近隣市町教育委員会と協定を交わしているが、その成果の検証を行っていない。特に、「ボランティア」や「インターンシップ」を実施によって、学校現場がどの程度助かっているのか、あるいは「教職インターンシップ」についてどのような課題意識を持っているのかなど調査する必要がある。これまで、「教職インターンシップ」はお互いがWin-Winの関係の中で実施しているが、そこに甘えることなく、より発展的で強固な連携体制を構築すべく、その検証を行っていく必要がある。

②「教職インターンシップ」や既存の教育実習までの継続的な学校現場での経験における学生の力量形成について

今回の調査では、「教職インターンシップ入門」を履修することによって、受講生の「教師効力感」と「実践的内容に関する学習の継続意志」に変化が見られるかを数量的に検討したが、いずれの項目においても統計的に有意な結果は得られなかった。今後は、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」で身につけるべき能力等に焦点化し

た独自の指標を作成することで、「教職インターンシップ」の教育的効果を明らかにしていきたいと考えている。

一方で、学生の記述や自己評価、学校現場からは、「教職インターンシップ」を通して学生が成長している様子が窺えた。以下の通りである。

- ①同一校において「教職入門セミナー」、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」の実習体験を2年間にわたって実施することにより、教職員との関係性が深まり、教科指導力や特別な支援を要する生徒への関わり方等具体的な指導の在り方を学ぶことができた。
- ②継続的な実習を通して、生徒の実態を把握し、コミュニケーションが深まり、学級活動への関わり方や生徒指導の在り方等を理解している。
- ③各教科の授業支援を行うことで、指導技術を学ぶことにつながった。
- ④問題傾向の生徒、特別支援学級の生徒、相談室登校の生徒など、課題を抱える生徒と体験を通して触れ合うことで、多様な生徒の対応について考える機会となり、生徒との信頼関係を築くことができた。
- ⑤大学での各教科や道徳、特別活動などの専門的な学びとその学びを生かした現場での実習、現場教師とのT・Tによる授業への関わりなど、大学での学びを現場で経験することでさらに学びを深めていた。特に、各教科の授業参観や指導案検討会、校内研修会などへの参加は、学生が直に学校の教育活動に継続的に関わることになり、実践的指導力の基礎を培うことにつながっていたと考えられる。

「教職インターンシップ」における学生の力量形成は、受入校によって経験できる内容が異なることもあるため、受講生全体としての変化を探るのは難しい点がある。そのため量的な調査ではなく、インタビュー調査などによって、受入校による違いや個別の変化、縦断的な調査など多角的に調査を行っていく必要がある。

③「教職インターンシップ」と既存の教育実習における学習の内容を明確にしたカリキュラムの提案

教育実習は、教科指導が重要な内容であるものの、「学生の履修履歴や免許状の種類に応じて、例えば、授業実習の比重を高めたり、学級経営の比重を高めるなど、実習内容を重点化することも考慮する必要がある」（中央教育審議会、2006）ことが指摘されている。

本学の「教職インターンシップ」では、「教職インターンシップ入門」において、教師という視点で学校教育の現場に継続的に参与することによる児童生徒あるいは集団に対する指導方法及び教職の意義を体験的に学び、「教職インターンシップ実践」において、各教科等の授業への指導補助及び学校行事等教育活動における児童生徒との関わりや体験を通して、「授業力の向上に係る指導スキルを学ぶ」、「生徒指導等の学校課題への対応の在り方を学ぶ」ことを目指している。具体的には、「教職インターンシップ」において、継続的な学校現場への関わりによって生徒理解を深めながら、授業観察や協働による授業づくり等を通して、教科や領域等の授業に関する基礎理解を深めることを意図している。また、「教職インターンシップ」は、同一学校に配置し、継続した

指導が受けられるように依頼している（可能であれば、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」、「教育実習」を同一学校で行えるようにしている）。これによって、指導教員が教師志望学生との密な関係を築き、系統的な指導が可能になり、学生の成長段階に応じた指導につながると考えている。また、同じ学校での「教育実習」は、児童生徒の実態を把握しやすく、それを踏まえた教材選択や授業実践が可能になると考えている。

以上より、「教職インターンシップ」は、教育実習において教科指導が重要な内容であることを踏まえると、自己の教職への適性や使命感を高め、生徒理解を深めながら教科指導等の基礎に繋がるような仕組みを作っていく必要がある。特に、本学のような付属学校のない教職課程を有する大学は、教育委員会や学校現場とも連携を取りながら、学生が系統的に指導が受けられ、学びを深めていけるような体制を作ることが「教職インターンシップ」の充実に繋がると考えられる。

<引用文献>

中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）

（沖縄大学 嘉数健悟）

